
白い猫と赤いリボン

緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い猫と赤いリボン

【Nコード】

N8024B

【作者名】

緋色

【あらすじ】

僕は、白い猫に出会った。その猫を追う僕が辿り着いたところは
……………？

第一話

白い猫に会った。

会ったというより、勝手に見つけた。

いつも通る通学路の端。

「ただの」とか「普通の」とって言葉が十個つくくらい、ありきたりな道で。

つやつやとして珍しい、赤いリボンの白猫を。

猫は、どこかへ向かって歩いていた。

長いしっぽをゆるゆる揺らして、速くなったり遅くなったり、止まってみたりなんかもして。

僕を挑発してるかのように動く、真っ白な毛並み。

くすんだ塀の色によく映える、真っ白な毛並み。

目で、足で、そいつを追う。

塀に登り垣根を越えてふちを歩く。

まるで猫になつたみたいに、白い猫を追う。

疲れとか空腹より、白い猫の行き先が知りたかった。

この猫はきつと面白いところに連れてってくれる。そんな変な期待を抱いていた。

僕は、日が落ちるのも、服が泥まみれなもの、どうでもよかった。

気付けば僕は、知らないところにいた。

明るくもなく、暗くもない。そして、何もなし。周りを見わたして

も、僕の影が動くだけ。

面白いところだ。夢の中か、幻想か。それとも現実か。それさえ分からない。

やっぱりあの猫、やるな。

キョロキョロしていると、自分が目に入った。服はひどく汚くて、指先は血だらけだった。

冒険しすぎた。そういえば体も、ところどころ痛い。

なにもないここで、ただ一つ、あったと思えたものがある。

それは、光。

光が見えた。ぼつとだけど、でも、確かにあった。

「君は、間違つてなんかないよ」突然そう聞こえた。それは、光のほうから聞こえた。

光の向こうに誰か居るのか。ここから出れそうにもないし、面白そう。

僕は聞いた。

「なんの話？光さん」

光は答えない。僕はその場に座った。

「それで、よかったんだよ」優しい声が頭に響いた。

「だから、なんの話さ。僕の話聞いている？」僕はちよつとだけ苛ついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8024b/>

白い猫と赤いリボン

2010年10月9日15時01分発行